令和８年度小平市立小平第十二小学校～「全国学力・学習状況調査」結果概要～

１　調査目的・対象

児童・生徒の学力や学習状況を把握・分析し、成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、今後の児童・生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てるための調査です。

２　調査内容

（１）教科に関する調査

身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等、また、知識・技能を実生活の様々な場面で活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関することを児童が答える調査です。

（２）生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関することを児童が答える調査です。

３　各教科の調査結果の分析

【国語】

状況の分析

国語全体の正答率は全国平均と比べて、0.9ポイント下回った。全国平均や東京都平均と比べて大きな差はないが、「情報の扱い方に関する事項」や「読むこと」の問題で正答率が低かった。「話すこと・聞くこと」については、全国平均よりも正答率が高かった。

課題

「情報の扱い方に関する事項」や「読むこと」の学習では、必要な情報を捉えたり、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめたりすることが課題である。必要な情報を捉え、自分の考えを構築することができるように、根拠を明確にして考える習慣を身に付けるための指導が必要である。

学校で取り組む具体的な改善策

文章を通して児童が必要な情報を適切に読み取り、そこから自分の考えを広げたり、深めたりすることができる場面を授業の中で設けていく。言葉の使い方等については、朝学習などを通して引き続き日常的に取り組むことができるようにしていく。また、学習者用端末に入っている学習ソフトを活用し、友達と考えを共有したり比べたりすることで、自分の考えや意見を分かりやすくまとめられるようにする。

【算数】

状況の分析

「知識・技能」における特徴は、「単純な数の構成」などは東京都平均と差がない一方で、「量（体積）の意味」や「数直線での表現」といった、算数的な概念を伴う知識の定着に大きな課題がある。特に「体積」や「数直線」といった、視覚的イメージと抽象的概念を関連付ける必要がある項目では、全国平均や東京都平均と大きな差があった。これらの課題を解決するためには、習熟度別指導によるきめ細やかな振り返りや具体物を用いた再指導を強化していく必要がある。

課題

思考力・判断力・表現力を問われる問題において正答率が低く、型に合わせて説明する力が育っていない児童も少なくない。今後は児童の習熟度をよく見極め、スモールステップを踏みながら記述式問題に対応できる力を身に付けさせる必要がある。

また、知識や技能はある程度身に付いていても、日常の場面で考えることに課題が残る。授業を行う際には、知識や技能を日常で使うことまで意識した授業づくりを行う。

学校で取り組む具体的な改善策

①成功体験を積み上げる。
　習熟度別指導を通して、「分かった」「自分でも解けた」という実感を一人一人にもたせる。
②言語化を習慣化させる。
　「どのように考えたか」を言葉にする活動を意図的に増やし、思考の活性化を促す。
③粘り強さを育成する。
　自力解決の場面では、答えを教えるのではなく、ヒントを提示しながら「諦めずに自力で解決できた」という達成感を味わわせる。
④学習活動で選択する場面を設定する。
　自力解決の活動において、学びの選択（自分・ペア・グループ・教員等）を取り入れることで、自己調整力の育成を目指す。

【質問紙】　状況の分析

　友達関係への満足度が高く、学級の中で異なる意見を受け止めてもらえるという安心感も比較的高い。また、ICT 機器を授業で活用する頻度が高く、学習環境への適応も高い。一方で、自分で学び方を考え工夫する力や、自分の考えを発表する力は低く、困りごとや不安を先生や学校の大人に相談する意識も低い。学習面では、記述式の問題に最後まで取り組む割合も低く、主体的に学習に向かう姿勢に個人差が見られる。

課題

　友達関係や学級への安心感が高い一方で、自分の考えやよさに自信をもち、主体的に行動する力に課題がある。また、学習場面では、自分で学び方を考えて工夫したり、考えを整理して相手に分かりやすく表現したりする力をさらに伸ばす必要がある。加えて、困ったときや不安なときに周囲へ援助を求め、自分の力で解決に向かおうとする力を育てていくことが求められる。

学校で取り組む具体的な改善策

①「考えを表現する」経験を日常化する。
　発表の上手さだけを求めるのではなく、まず自分の考えを書く・図にする・友達に説明するなど、表現のハードルを下げる。ペア→小グループ→全体という段階を設定し、「伝わった」「聞いてもらえた」という経験を増やす。
②「自分のよさ」に気付く機会を増やす。
　友達関係の満足度が高いという強みを生かし、友達からの肯定的なフィードバックを意図的に取り入れる。
③学校全体で「児童が選ぶ・考える・振り返る」を共通化する。
　校内研究のテーマである「学びの選択」と絡め、「自分で考える → 選ぶ・試す → 人と関わる → 振り返る」という学びのサイクルのもと、児童自身が学習方法を選択する場面を意識的に設定し、全校共通の取組として、どの学級でも実践していく。